
Brain Syndrome **脳過活動症候群**

uduki maya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Brain Syndrome 脳過活動症候群

【Nコード】

N1676Z

【作者名】

udukimaya

【あらすじ】

西暦1990年初頭、世界に新しい病が広がった。OverActive Brain Syndrome「脳過活動症候群」、文字通り脳の活動が通常よりも亢進してしまう病。その病により一般人よりも脳の能力を行使できる人々は脳力者と呼ばれた。脳力を隠す少年は、いつしか脳力者同士の争いにその身を委ねていくことになる。繰り広げられる能力者同士の戦いの中で、少年が見るものは……。

人権団体と称したテロ組織や、謎の組織、警察、政府を巻き込んだ

大事件に立ち向かう少年少女の活躍に乞うご期待！

R15と残酷な描写ありをつけているのは、一応です。
基本的に全年齢に対応です。

作中に出てくる脳の話は基本的に若干の拡大解釈を含んでいます。
脳の解剖生理とは異なる部分もでてきますが、そこはご了承ください。
ださい。

プロローグ（前書き）

見苦しい文書には、叱咤と寛容な心を。

評価に値する文書には、激励と戒めを。

精一杯書きますのでよろしくおねがいします。

プロローグ

西暦1990年初頭、世界に新しい病が広がった。

Over Active Brain Syndrome「脳過活動症候群」、文字通り脳の活動が通常よりも亢進してしまう病。シナプスを介した脳の電気的情報伝達が過剰になってしまい、脳組織の破壊を引き起こす。多くの人々を短命に導いた病は世界に震撼を引き起こした。

しかし、OBS（英語の頭文字をとってそのように呼ばれていた）にかかった患者は破壊と同時に一つの効用を得ることになる。脳の情報伝達が通常よりも亢進することで、脳の能力が通常のそれとは比べ物にならなくらい向上したのだ。その能力を行使し、病に対する特效薬が作られたのは、OBSが世間に認知されてからわずか3年後のことだった。それ以来、OBS患者の脳の過活動は抑えられ、健常人と同様の寿命を得ることができた。

特效薬の登場で病は収束を迎えると思われたのだが、定期的な特效薬の服用を行っても脳の過活動は完全に抑えられるわけではなく、一般の人よりも活動は亢進していることがわかった。それによる脳の能力向上は抑えられることはできなかったのだ。OBS患者は、その脳の過活動に伴う超能力を保有することになり、脳力者と呼ばれるに至った。

しかし、脳力者は担ぎ上げられるわけでもなく、もてはやされるわけでもなく、重い病気の患者であり、わけのわからない能力を持っている気味の悪い障害者と世間では認知されていた。そのため脳力者はその脳力を世間では障害と識別され、ある人は同情の目で、ある人は侮蔑の目で脳力者たちを見るようになっていた。

脳力者達が世間の目を避けて生きるようになり十数年後、日本。そこでも、脳力者達を取り巻く環境は何一つ変わることなく安穩に時は過ぎていた。まるで、激しい変容が始まる前の静寂の如く……。

出会いと気付き

2017年、4月。東京都文京区にある普通科高校では多くの生徒達がいつもと変わらない日常を過ごしていた。2年生に進級したばかりの秦野千影はたのちかげも同様であり、教室で昼食を食べたあと、ぼんやりと外を眺めていた。

「おっ、千影。宿題やってきたか？」

唐突に千影に話かけながら赤毛の少年が前の席に座り込む。その声に千影は反応し、外に向いていた視線を少年に向けた。

「ま、一応ね。孝明、もしかして」

「へへっ。いつもありがとうございますっ！」

そういうと短髪の少年は、千影の言葉を遮ってノートを取り上げた。

「……しょうがないな。でも、たまには宿題やってこないと、テストあぶないよ？」

「わかってるよ。でもでももっ、とりあえずは差し迫っている危機を乗り越えるのが先なのさ」

そういうと、赤毛の少年は教室の正面を向き、ノートを写すのに躍りになった。

だらしなくルーズな性格と、赤毛という模範生からは程遠い外見ではあるが、屈託のない笑顔はどこか憎めない。千影もいつものことだと呆れていたが、小さくため息をついて再び教室の窓の外を見た。外は雲ひとつない青空だったが、千影と呼ばれた黒髪の少年の心はどこか晴れなかった。長めの前髪に遮られたその視線は窓下に広がる校庭を越えて、遠い遠いビル群の果てを眺めていた。

「いや、助かったよ、千影！あいつ俺を目の敵にしてやがるから、しつこいのなんのって。なあ？」

「単純に順番が廻ってきただけじゃないか。この前は笠間で終わってたから次の木戸孝明きこうかあきに当たるのなんて予想できるよ」

「なんだよ、感謝してんだからそんなのどうでもいいじゃんか！」
放課後、二人は下駄箱を出て校庭を突っ切っていた。下校の際は正門に向かうため皆この場所を通る。正門まで延びた人の列は蟻の行列のようだった。

「千影はこのあと暇か？もし暇ならちよつと付き合えよ。いつものお礼にジューズくらいは奢るぜ？」

そういうと孝明は立てた親指を進行方向に向けてポーズを決めた。一体いつの時代に生きてきたのだろうと千影は顔をしかめたが、あえて突っ込むと面倒といった面持ちでそこは流した。

「あ、別にいいけど。どうせいつもの所に行きたいんでしょ？」
「まあな。あそこは俺の聖域、最後のアイドル、心ちゃんが待っているんだよ！あの愛くるしい瞳、すらつとした身体、胸を突き刺すような歌声、どれをとっても今まで出会ったことのないくらい最高の美少女だ！」

話す口調が徐々に大きくなっていき最後は校庭全体に響き渡るような大声を上げていた。高々と上げた拳は天を向いており、降りる気配すらない。その様子に周囲の生徒達は訝しげな目で見てくるがそれは全く気にならない様子だった。

「わかったから。さっさと行ってさっさと帰るよ。俺は」

孝明は根っからのアイドルオタクであり、いつも放課後はグッズが売っている直売所に顔を出している。心ちゃんというのは、このあたりで活動をしている所謂ご当地アイドルといったものだった。入学当時から比較的仲のよかった孝明にむりやり連れられていた千影にとって、こんなことは慣れたものだった。

「ほんと、アイドル好きさえなんとかすればもてそうなのにな、孝明は」

苦笑いを浮かべて孝明を見るが、その目はもうすでにこれからたどり着く店内を見つめているようだった。

程なく正門を抜けて歩道にでる。ここから10分も歩けば孝明の目指す店にたどり着き、馬鹿な話をしながら帰途に着くはずであった。しかし、その日は予定通りいかなかった。校門を出て少し歩くと後ろから少女の悲鳴と怒号が聞こえたのだ。

「きゃー、何なの、こいつ!?!」

「待てこらーっ! 下着泥棒っ! 誰か捕まえて、そいつ泥棒でーすっ!」

二人はその声に振り返る。それと同時に二人の横をサングラスとマスクと付けた見るからに怪しい人間が走りすぐ横を通り過ぎた。そして、それを追う二人の女子生徒は息を切らし、正門のあたりで立ち止まっている。

「おいつ、今のが下着泥棒か!?!」

孝明がその男を目で追いながら声を上げる。

「それっぽいね」

走り去る男の後姿を千影は落ち着いて眺めていた。

二人の姿を見るや否や、下着泥棒を追っていた女子生徒は二人に詰め寄った。

「ちよつと何やってるのよっ! 追いかけてよ! あいつ下着泥棒なんだって! 何ぼさつとしてるの?」

「いや、ちよつと待ってよ。今からじゃ走っても追いつけないし、そういうのは警察にまかせ」

「なによ、だらしなない! お願いだから捕まえてっ!」

女子生徒は涙目になりながら千影に迫っていた。しかし、対する千影は顔を背け目を逸らしその猛追から逃れようと身体をねじる。

「おい、千影。困ってるんだしそういう言い方は」

孝明が千影に話しかけ場を収めようとした刹那、四人の間に風が吹き抜けた。

それと同時に下着泥棒が逃げた先で鈍い悲鳴が聞こえる。

悲鳴の方向に視線を向けた四人が見たものは、倒れている怪しい男とそれを踏みつけている女だった。その女は、助けを求めた女子生

徒と同じ制服を着ていた。

その女は遠めからもわかるくらいスタイルがよく背が高い。茶色い髪の毛をポニーテールにし束ねておりすらりと伸びる足は男に突き刺さっている。倒れている男を蹴り上げて一瞥すると、女は正門に向かって歩き出した。

「ありがとうございますつ。ほんと助つ……」

「あ……」

お礼を言い走り出した女子生徒たちは女の顔が見える位置まで近づくと途端に声をつぐんだ。

「本当にありがとうございます」

「ありがとうございます」

恐る恐る女に近づき盗られた下着を受け取りしまい込むと、感謝の礼も早々に校内に向かって走り出していた。その顔は犯人を捕まえてくれたことに対する感謝の表情などではなく、ひどく怯えている。女はその様子を特に気にする様子もなく正門に向かう。

千影はそのやり取りを見て訝しげな表情を強めた。

「ねえ、孝明。どうしてあの女子生徒さつさと戻っていったの？せ

つかく犯人捕まえてくれたのに」

「おい、千影、お前知らないのか？あの女、五十川茜いそがわ あかねだぞつ？」

「五十川茜つて……同じクラスの女子だろ？」

「そうだけど、違つて！五十川はこの辺じゃ有名だぞ？いいか。

あいつはこの辺りを締めてた不良をグループに去年突然乗り込んで壊滅させたのを皮切りに、絡んでくる不良を次から次へと黙らしちまうんだ。あの蹴りでな。どんなに多党を組んで追いかけても、速すぎる足に追いつくことも出来ない。目を合わせたら最後、電光石火の早業でこの町から消えることになる。巷では光速の鬼姫とまで呼ばれている危険な奴だ。そして、この学校唯一の脳力者だよ」

「脳力者……」

孝明は声が漏れないよう千影の耳下で話しかけていた。

「だから、関わり合いにならないほうが無難だつて。知らん振りし

ていくぞっ」

そういつて孝明は千影の腕を掴んで前へ進もうとする。……するが、何かに遮られて進めない。

「あれ、なんか前にある……？」

孝明が顔を上げると目の前に茜が立っており孝明を鋭く睨み付けていた。

その目はひどく冷たく、整った顔はその迫力を増進させていた。

意志の強さが伝わるようなアーモンド形の目には、年相応の幼さが少し残っている。

「邪魔なんだけど、どいてくれる？」

感情を含まないセリフが孝明に浴びせられる。その迫力に無言で道を譲った孝明のことは誰も責められないだろう。

その様子を同じく無言で見っていた千影が茜を見ながら孝明に声をかけた。

「そんなにびびらなくてもいいんじゃない？ 走る姿が見えないわけじゃないんだし」

「ばか、さっきだってあの女が動いてるの見たか？ 見えなかったら？ それだけ速いしそれだけやばいんだよ」

「そっか、そうなのかな」

「そうなのかなって、お前なあ。まあとのかくやばいやつなんだから気をつけるってことだよ」

「わかったよ。でも今日のことは孝明的には嬉しいことだったんじゃないの？ 女子生徒の下着を拝めたんだからさ」

「下着って、そんなのどこで見るんだよ……」

「そういうながら孝明は千影を見ながら首を傾げる。

「あつ、それは……そうだよ！ 女子生徒が受け取るときに見えちゃったんだよね。孝明は見えなかったの？」

「みえなかった……。くそ、お前だけ」

そう言っていると孝明は悔しそうに顔をゆがめる。見えないところで千影は汗を拭いた。

「そんなことより、はやく店にいかなくていいの？ 時間おそくな
つちやうよ」

「おおっ！ そうだった。心ちゃんっ、待ってるよ！！」

そう言うと、孝明は再び拳を掲げて空にまだ見ぬ心ちゃんを描く。

千影は安心したように苦笑いすると、まだ日の沈まない町へと歩いていった。

しかし、千影は気付かない。その後ろでは強いまなざし向けられていたことを。

掴みあいは音楽室で（前書き）

この話から脳の話がちょこちょこでてきます。

脳の部位や働きについては大まかなものを参考にはしていますが、若干拡大解釈をしたり事実とは異なる部分もあるかと思いますが、そこはご了承ください。

掴みあいは音楽室で

「ちよつと来て」

千影はその言葉の意味をよく飲み込めていなかった。考え込んでる間もなく、腕をつかまれ引きずられていく。掴まれた腕が痛む。掴んでいる手はとても細く、滑らかに伸びた指はかなり華奢にも関わらず抵抗できなかった。

「ちよつと、待って。えつと……五十川さん、だよな？　なんで急に俺は連れて行かれているのかな？」

「いいから、こつち来て」

淡々としたしゃべり口調とは裏腹に茜は強引だった。

朝、千影が登校してきたと思ったら教室に現れ、周囲の注目お構いなしに千影を連れて行ったのだ。いや、この場合さらっていったのほう正しいかもしれない。

「ここならいいわね」

そういうと、茜は千影を音楽室まで連れてきていた。

朝なのでまだ誰もおらず、薄暗い音楽室には二人の影が静かに浮かび上がっている。

円らな瞳でじつと見つめられてしまい、千影は視線の置き所に困り宙を仰ぐ。

その瞳は徐々に千影に近づき、動揺を誘った。

ふわりと甘い香りが千影の鼻をかすめ、目の前にいる美少女から意識を逸らすことは出来なかった。

その刹那、茜は千影の胸ぐらを掴みさらに顔を近づけた。

その手には力がこもり、千影の呼吸を妨げる。

「なっ
」

「ねえ、あんた。もしかして脳力者？」

その質問に千影の顔は一瞬強張るも、すぐにその腕を跳ね除け距離をとった。

「げほつげほつ……、いきなり何するのさっ。それに脳力者って君のことでしょ？俺には関係ないじゃないか」

むせた呼吸を整えながら、茜を睨み声を絞り出した。

「そうよ。私は前頭葉の運動領野のOBS。噂になってるかもだけど、下半身の筋力強化が脳力よ。超短距離ならば、一般人が気付けない速さで動くこともできるの……。でも、不思議よね。あの時私は気付けないくらいの速さで動いてたはずなのにどうしてそれをあんたは知覚できたの？あの口ぶりだと見えていたんでしょ？」

千影は目を見開いて茜をみた。そしてすぐに視線を外し下をみる。

「っ……」

「馬鹿な友達で助かったわね」

そういうと茜は繕ったような小さな笑みを千影に向けた。

対して千影の表情は曇り顔をしかめた。

「そして、もう一つ。あんた、あの時盗られた下着がどうのって言うってたわよね？」

茜は笑みを正してもう一度千影を睨みつけた。

「下着を返すとき、私は周囲に見せないように気をつけたし、あの子たちもそうだったわ。そうになると、あんたが下着を見れたのは、下着泥棒があんたたちの横を通り過ぎたときだけ。それも一瞬の出来事だったはずだけど」

「いや、そんなはずは」

「私、最初から見てたのよ。だからわかったの」

千影の視線は動かない。静寂が再び訪れる。

埒があかないと思ったのか、広がった距離を縮めようと茜が一步を踏み出す。

しかし、それを静止するように千影が声をかけた。

「俺が脳力者のわけないよ。どこにでもいる一般人だって。ばかばかりしい。もういくよ？」

長い前髪をたくし上げながら、茜を鼻で笑い出口へと歩いていく。出口のドアに手をかけたかと思うと、千影の後ろでドンツという音

が響いた。

その瞬間、ドアにかけた千影の手は茜によって掴まれる。数メートルの距離を一瞬でなかったものにしていったのだ。

千影は驚きで声がない。驚愕と畏怖の目で茜を睨みつけていた。

「今のは私の スリッドスター 電光石火。この脳力の前に逃げ出すことなんかできないわ」

「君は何がしたいんだ？」

千影は動かず問いかけた。

「あなたの脳力、私のためにつかないさい」

「は？」

千影は呆気にとられ間拔けな声を挙げた。ドアから手をはなし、茜と向かい合う形になる。掴まれた腕も自然と解けた。

「あなたの脳力、おそらく視覚系でしょ？ その長い前髪はおそらく、視力を操るときの水晶体の動きを隠すため。脳力の程度にもよるけど、使えるわ、それ」

その言葉に千影の表情が消える。空ろになった視線を茜に向けつづやいた。

「君もその手のタイプか……」

「え、何？ 聞こえないんだけど」

茜の問いを無視し顔を上げ今度は大きな声で宣言した。

「俺は脳力者じゃないけど、それでもいいなら協力してもいい。ただし、一つ条件があるんだ」

「条件……？」

訝しげに感じたように茜は眉間にしわをよせる。

「君の自慢の足を使っていいから、もう一度俺の腕を掴んでみて？」

それができたら言うとおりにする。もし逆にできなかつたり俺が君の腕を掴めたら、もう一切俺に構わないで」

「はっ、何その条件。簡単すぎて欠伸がでちゃうわ」

茜は失笑し小ばかにする様子で肩を竦めた。

「条件をのむのか、のまないのかどっちにするの？」

「いいわ。でも後悔しないでよ？ 一瞬で勝負ついちゃうんだから
そういうと薄ら笑いを浮かべ、千影を中心に円を描きながら歩き始
めた。

2、3歩、歩いたかと思うとその姿が大きな音と共に消える。

同時に千影に対して真っ直ぐ距離を詰め、その腕に照準を合わせ近
づいていた。

(もらったわっ)

茜は口角を上げ勝利を確信した。右手を出し掴む動作に入る。
が、その軌道にもう腕はなかった。

腕を掴めず千影を通り過ぎてしまった茜は再び標的を補足する。

(少し腕が動いたみたいね。油断したわ。今度こそっ)

自分を戒め今度は背後から左腕に向かって切り返した。

しかし腕は掴めない。

再度千影を通り過ぎ立ち止まる。

(ありえないっ)

千影に背を向けたまま茜は驚愕していた。

茜が千影の右腕に向かい後ろに回り切り替えして今の位置に至るま
で、1秒もかかっていない。

普通の人では反応すら出来ないレベルのはずだった。

しかし腕は掴めていない。タイミングよく掴む瞬間にぎりぎりの動
作でかわされていたのだ。

茜の見立てでは千影は視覚系の脳力者であるため、動きが見えてい
るだろうとは思ったのだが、ここまで鮮やかにかわされるとは思っ
ていなかったのだ。その驚きだった。

(見えているってのは相当厄介ね。今は動きの勢いで掴みにかかっ
たからかわされたけど、それなら……)

考えをまとめると間を置かずに、再び足を踏みつけ動き出す。

左腕に向かわせた身体を目の前まで行って瞬時に右腕に切り替える。
フェイントだ。

(くそっ)

しかし、茜の腕は空を切るだけだった。

そのまま何度も切り返し挑んだが全てかわされる。

(それならっ)

茜は照準を腕から足に変えて、足に向かって蹴りを繰り返した。体勢を崩してから腕を掴もうと考えたのだ。

しかし、その蹴りも空を切る。1メートルほど後ろに引かれてしまい容易にかわされてしまった。

空を切った足を回転させ身体の向きを変え、距離をつめる。猛追の勢いを止めることはない。

移動した直後の僅かに崩れた身体のバランスを整える前に腕を掴みにかかる。

再度茜の腕が空を切ってしまい、切りかえそうとした矢先

「きゃっ」

茜の動きは止まっていた。

空を切った茜の腕を千影ががっしりと掴んでいたのだ。

「これで俺の勝ちだね。約束は守ってよ」

短くそう告げると千影は静かに腕を放し音楽室から出て行った。

残された茜は両手を握り締め、奥歯を噛み締め動けずにいる。

さっきまで怒涛のように鳴らされていた床の音は余韻として音楽室残り、それが消え失せていくほど茜の顔は徐々に猛り、目に見えて

紅潮していた。

三人目の脳力者

(失敗したかな……)

千影は頭を抱えたため息をつきながら教室への道のりを歩いていった。彼女 五十川茜の脳力に真っ向から対抗してしまったのだから当然の感情だ。

普段は怒ることなどなく温厚な彼だが、茜が唯一触れられたくない部分に触れたのだから冷静でいられるはずもない。

先ほどの攻防からわかるとおり、千影も脳力者の一人だ。後頭葉、有視野のOBSであり、視覚能力の向上という脳力を持っている。しかし、その事実は周囲の誰にも漏らさないよう配慮しながら今まで生きてきたのだ。

千影の背は170cm程度と高校生の男子としては平均的であり、体格も比較的痩せ型ではあるが一般的。元々性格もそれほど派手ではなく、唯一特徴がある目は長い髪で隠していたから千影個人の印象はどちらかというところと薄いほうであろう。

大きくはつきりとした目は誰もが引き込まれるほどの魅力を携えてはいたが、それも髪の毛を伸ばすことと千影の努力である程度隠すことができていた。

地味であるという自らの持っている特性を活かし、人目につくことを避け、自分の秘密を隠し通すことに尽力した成果が、ここにきて崩れ去ることになったのだから千影の落ち込みは多大なものだった。教室に戻り、クラスメイト達と雑談を交わし日常に戻っても、彼の憂いは晴れることはなかった。

千影が自分の机に突っ伏していると間もなく茜が入ってくる。千影は今まで意識することはなかったが、入ってきた茜に対してクラス中の皆の意識が集中し直後にクラスの雰囲気がい様なまでに静まり返る。それは、茜に対する恐怖と無関係を装うという態度そのものだった。これが世間一般の脳力者に対する代表的とも言える反応

だった。千影が事実を隠していた理由の一部はこういった世間の目があったのだ。

（これはひどいな。いじめにあってる小学生みたいじゃないか）
千影はそう重いながら苦虫を潰したように顔をしかめた。

対して差別的な感情を向けられた茜は無表情で自分の席に座る。その動作に動揺はなかった。

先ほどとは違う憤りを千影は感じていた。

次の日、千影はやつと慣れてきた自分の椅子に座りながらも異様な居心地の悪さに苛まれていた。後ろからの視線が痛い。

（すごい見てるよ。振り向けない……）

茜が後ろからものすごい形相で睨みつけているのだ。

その様子は周囲にも影響を与え、殺伐とした空気が教室に漂っていた。

「なあ、お前五十川になんかしたのか？」

怪訝な顔を浮かべ孝明は千影へ耳打ちした。

「いや、何も。下着泥棒騒ぎがあったあと少し話ただけだよ」

「真実は話せない。嘘を言わずに事実を包み隠しながら千影は友人に説明をする。」

「なんでもいいから、怒らせてるのは間違いないって！ お前のことずっと睨みつけてるぞ？心当たりがあるなら謝っちまえよっ」

その言葉には、早くこの空気をなんとかしてくれ、という懇願の意味がこめられていたのだろう。千影を焚き付けるように背中を叩いた。

（参ったなあ。これほどまでに敵意むき出しだなんで……）

千影は頭を抱えて机に突っ伏すしかできることはなかった。

そうしている間に始業時間が過ぎ、教室に担任の先生がやってくる。そこまではよかったのだが、その教師の後に見慣れない女子が

一人くつついてきていることに気付き教室がざわめいた。

「ほらっ！ 静かにしろ。」

そういうと両手を叩き、生徒達の意識を自分に向ける。

「ホームルームを始める前に転校生を紹介する。ほら、来なさい。」

……彼女は如月雪葉だ。きんづきゆきはずっとアメリカに住んでいて、その移住手続きにすこし手間取ったためみんなには少し遅れての仲間入りになつてしまったな。ほら、自己紹介を」

先生に促されると如月と呼ばれた少女は一步前に出て軽く会釈をした。

落ち着いた様子でクラスを見渡し息を吸い込む。

その息で声が紡ぎだされるかと思いきや、雪葉はその期待を大きく裏切った。

歌ったのだ。

それも、尋常ではないくらい美しい歌声で。

細くガラスのように繊細な印象の声はだんだんとその芯の強さを露にし皆の胸にしみこんでいく。波打ち際のさざ波のように聞こえても、気付いたときには大海の奥底のような深みに包まれた妙な感覚に皆魅せられていった。

小さい身体から伸びる細い手足。腰まで伸びる絹のように滑らかな黒髪。雪のように白い肌。整った顔立ちに丸くはつきりとした目。

歌声に加えその美しい外見も合わせて、クラス中の皆が雪葉に見惚れていた。

わずか数十秒の間だったが、その歌声が止んだ後もその余韻を打ち砕くものはだれもなく、教室が静けさに包まれていた。

「はじめまして。如月雪葉です。歌を歌うためにアメリカに行っていました。が家庭の事情で日本に住むことになりました。どうぞよろしくおねがいします」

再び会釈をすると教室中に拍手が沸き起こった。

それは歌声に対する賞賛と歓迎の証。しかし、それも長くは続かなかった。

「私は、前頭葉、運動性言語中枢のOBSです。脳力は 超絶歌唱 《ビューティフルディーバ》。皆さんよろしくお願いします」

OBSという言葉聞いた瞬間にクラス中が驚きに包まれ拍手は止んだ。皆の意識に刷り込まれている差別という名の防御反応が途端に顔を出す。

その反応に首を傾げていた雪葉だったが特に気にした様子もなく言われた席についた。

徐々に教室は正常を取り戻していったが、千影と茜は二人して目を見開いて雪葉を見つめていた。その視線に含まれる感情は、敵意でも羨望でもなくただ驚きだけだった。

はじめは距離を置いていたクラスメイトも、雪葉の持つ独特な魅力に惹かれていき昼休みには机の周りをクラス中の皆が取り囲む形になり質問せめにしていった。その質問は転校生に対しての質問もあったが、多くは普段あまり関わりをもたないOBSという病気についてのことが多かった。

「その脳力って使おうと思うと使えるものなの？ 疲れたりとかってするのかな？」

「やっぱり最初は意識を集中させないと使えないかな。でも段々と慣れてくるとそんなに疲れないでやれるけどやっぱりずっと使っていると頭が痛くなってきたら。そこまでは普段することはないけどね」

「ねえ、如月さん。あの歌はさっき言ってた 超絶歌唱 《ビューティフルディーバ》って脳力を使って歌ってたの？」

「そうよ、歌うときは意識しなくても脳力が見えるように訓練したの。あの歌声はその脳力のおかげってことになっちゃっかな。でも私もがんばって歌ってるんだよ」

「他にもできることってあるの？」

「うん。理論的にはできるんだらうけど……それをやっちゃっとな。一応病気だからさ」

朝の教室の空気とは打って変わって賑わいを見せている。

今まで学校唯一のOBSであった茜に対する対応とは完全に真逆の反応であり、皮肉にもそれは茜がもたれてきた印象がOBSによるものではないと言われているかのようだった。

茜自身が醸し出す空気はなんら変わっていないのだが、それを押し殺すほどの雪葉の空気が教室中に満ちていた。その日の話題は雪葉一色になっていた。

放課後千影は一人で下校していた。孝明は例の如く心ちゃんを求めて町に繰り出してしまっていたのだ。今日は握手会があるらしく、下校のチャイムが鳴った瞬間にその姿は忽然と消えていた。

千影の家は学校から20分程歩いた所にある。もちろんそれなりの距離があるしバスでも電車でも使える交通機関はいくつかあるのだが、あまり学校の人たちと顔を合わせたくないがためにいつも歩いて登下校をしていた。そして、その道程にある大きな公園も、歩いて登下校する一つの理由になっていた。公園には木々が生い茂り小さな池には渡り鳥が羽を休めている。その周りには散歩をしている人が多くおり、隣にある広場では子供達が走り回り汗を流す。そんな日常を気負いなく眺めているのが好きだった。自分には手に入れないものでも、ここにいればそれを感じることができる。千影にとってそれは慰めにも似た感情であったが、それが嫌ではなかったのだ。

千影は今日もいつものように缶コーヒーを買ってベンチに座る。一人で帰るときの日課のようなものだった。土とコーヒーの香りが混じり一日の疲れを癒してくれる。

「隣、いいですか？」

不意に声をかけられる。珍しいことだな、と見上げるとそこには今日の話題の人、如月雪葉が立っていた。

「えっと……」

「雪葉です。はじめまして、千影様」

そういうと満面の笑顔を浮かべ千影の横に隙間を空けずに座る。

千影はその状況が理解できず顔を紅潮させ固まっていた。人とあまり関わることのない千影にとって美少女の身体に密着するなどといった経験はなく、どうしていいかわからない。

「どうということ？ 俺達始めて会ったと思うけど……。それに様って……」

動揺した千影を見て微笑むと雪葉は顔を近づけて話し始める。

「それはですね、千影様。私、あなたのお母様にアメリカでお世話になっていたので。あなたも知っている通りもう亡くなられていますが……。」

「母さんのっ!？」

千影は予想外の人物の登場に驚き、身をたじろげた。

「そうです。生前、お母様から頼まれて私は千影様の助けになるようにと言われていました。その準備がやっと整ったので日本にこれたのです。これから、よろしく願いますね。千影様」

そう言うと千影にさらに顔を近づけて微笑む。ゆっくりと近づいてくる顔との距離を保つために千影は背を反り顔を遠ざける。

「私は千影様のためにここにきました。だから、なんだってして差し上げます。なんでもですよ」

そういうとかわいらしい笑顔の中に妖艶な笑みが生まれる。

その表情に千影の鼓動は早鐘を打つ。年頃の男子ならそう言われて多くのことを想像しないわけがない。

瑞々しい唇と黒く輝いた真珠のような瞳が千影の視界に埋め尽くされる。思考は停止し、雪葉の誘いに抗えない千影がそこにいた。千影の身体に雪葉はまたがりその密着度を上げていた。

まさに、互いの唇が重なるつかところ、鋭い叱責の声が突き刺さる。

「あんたたち、何やってるわけ!? 会っていきなりだなんて馬鹿

なんじゃない？」

その声に驚いて振り向くと、そこには腕を組み蔑みの目で見下ろしている茜が立っていた。

途端に現実に引き戻された千影はベンチから立ち上がり、視界は宙を漂った。

「別に何もやってないって。話をしたただけだよっ」

その言葉に雪葉も茜も釈然としないといった面持ちで、しかめっ面をしている。

「そんなことより、なんの用？ 五十川さんは俺にはもう関わらないはずじゃない？」

その言葉に茜の顔の引きつり具合はさらに増す。

「あなたに用があるわけじゃないわ。そっちの女に用があるのよ。同じOBSとしてね」

自分を指名された雪葉はゆっくりと立ち上がり茜と相對する。先ほどまでの笑顔はなくその顔は無表情そのものだ。

「あら、私はあなたに用はありません。千影様とのことを邪魔しないでいただきたいのですが？」

「あなたOBSなんでしょ？ だったら協力しなさい。私にはやらなきゃいけないことがあるの」

「あらそうなんですか？ 私はそんなの関係ありませんが。私の意志をもし理解できたなら、ここから消えて下さる？ 独活の大木さん？」

馬鹿にしたようなその物言いに茜は弾かれたように雪葉に詰め寄った。

「いいから付いて来いって言うてるのがわからない？」

「その下品な顔を私達にさらさないでと言っているのがわからないかしら？」

周囲の空気が張り詰める。

その重さに耐え切れなくなった千影は二人に割って入った。

「ちょ、ちょっと待った、二人とも。周りの人が見てるって。ほら

落ち着いて。ね？」

千影の言つとおり周囲の子どもや老人は遠巻きに諍いの様子を傍観している。

三人とも制服だから、何か揉め事を起こしたらすぐ連絡が行ってしまっただろう。

それを察したか二人は離れとりあえず場の空気は落ち着いた。

「申し訳ありません。千影様。私としたことが、ご迷惑をおかけしてしまつて」

そついうと雪葉は千影に深々と謝罪をする。

茜はそれを眺めながらあきれたようにため息をついていた。

「もう今日はいいわ。とにかくつ、あんたたち二人とも気に入らないけど、OBSとしての力、絶対に手に入れて見せるから」

そつ言うつと踵を返して消えていった。

災難が去つたと一息ついた千影を尻目に、雪葉は邪魔者が去つたと嬉々とした顔で千影の顔を見つめていた。

「あ、俺もそろそろ行くね。如月さん」

雪葉の重々しい視線に気付いた千影は早々にその場から立ち去ることを選択した。

「千影様っ？ 私これから」

「また明日っ。じゃあね、気をつけて帰つてね」

雪葉の言葉を遮ると、小走りでその場から逃げ出した。

その様子にふて腐れたように頬を膨らませた雪葉だったが、すぐにその表情を笑みに変え千影と同じ方向にゆっくりと歩いていった。

始まりは日常の中で

千影は朝から浮かない顔をしていた。別に、朝寝坊をしたとか体調が悪いといったことでは断じてない。多くの生徒達から注目を浴びていたせいだ。そして、その注目を浴びる原因となっているのが、両脇にいる二人である。雪葉と茜だ。

事の起こりは昨日の夜からだ。公園での揉め事の後、千影は夕食の材料をスーパーで買って自宅へと向かっていた。千影は親の残してくれた家に一人で住んでいるため、家に灯りは付いていないはずなのだが、その日は違った。家には千影を出迎えるようふに灯りが煌々とついていたのだ。

（おかしいな。叔母さんは様子を見に来るだなんて言ってなかったし……）

千影は窺うように玄関のドアをそっと開ける。

そしてその視界に入ったものに千影は言葉がでなかった。

「な……」

「お帰りなさいませ。千影様っ」

そこには、制服に白いフリルのついたエプロン姿の雪葉が立っていたのだ。

くると一回転すると、エプロンとスカートがふわりと浮かび、白い太腿が露になる。再びこちらに向くとスカートの両端を軽くつまみ、満面の笑みで淑女のようにポーズをとった。

いるはずのない人がいたことと、その光景に見惚れてしまったことが重なりドアを開けたまま動けずにいる千影を不思議に思ったのか、雪葉は首を傾げながら近づく。

「何をやっているんですか？千影様っ。早く中へお入りになって？ほらっ」

そういうと、千影の腕を両腕で抱えて中に引っ張った。その際偶然にも（？）成熟途中の柔らかな膨らみが腕に密着し千影に動揺が走

る。

「ばっ、何すんだ！？っていうか、どうして如月さんがここにいるの？ここ、俺の家だよっ？」

慌てて腕を振りほどいた千影は疑問に思っていることを問いかける。「わかっております。今日からこちらでお世話になることになっている雪葉です。よろしくお願いしますね？」

そう言うと、再び笑みを浮かべて近くへよってきた雪葉を千影は必死になって避け家の中に入った。

「晩御飯は今からお作りしますので、ゆっくりしててくださいね」慌てふためいている千影を気にかける様子もなく、雪葉は当然のようにキッチンへ入っていく。

「ちよっと待ってよ。どうしてここにいるかちゃんと答えてくれなにとっ」

その質問が聞こえているのかいないのか、雪葉は包丁とまな板を使い均一なリズムを奏でていた。

「ちよっと、如月」

「あなたのお母様が亡くなられてからもう1年が過ぎました。千影様がお母様と別々にお過ごしになってからは5年ほど経ちますでしょうか。千影様とお母様が離れ離れになった頃、私はその頃からお母様のお世話になってきました。」

唐突に話し始めた雪葉の声は柔らかだがどこか張り詰めている。表情こそ変わらないが、今までの様子とは違っていた。

「私はOBSの立場が日本よりも幾分ましなアメリカにいましたが、それでも差別の対象として孤立しておりました。住む場所も転々とし、施設にいるところをお母様の研究の関係で一緒に住むことになったのです」

「母さんと住んでいたのか……」

「はい。もちろん仕事のことかなければ一緒にはいられなかったでしょう。それでも、私は今までの人生とは全く違う時間を過ごしました。誰かに必要とされ名前を呼ばれ、自分の力が役に立つという

ことも知りました。そして千影様のことも……」

「俺のこと……」

雪葉の言葉に千影は顔をしかめる。

それに応ずるかのように、一定のリズムで奏でられた音は止んだ。

「ええ。いつも千影様の話をされていました。どんな人でどんなものが好きなのか。いいところもだめなところも、いっぱい知っています。あなたのお母様から聞いたんですから……。そして、お母様がなくなる前、最後までお母様は千影様のことを心配しておられました。お母様の中では千影様は5年前のままの印象だったのでしょね。微笑みながら千影様のことを私に託してくださいました。どうか、千影の力になってほしいと……」

雪葉が話し終わると静寂が訪れる。考え込む千影の目を、真っ直ぐに見つめる雪葉。その瞳は透き通っており、揺らぐことはない。その瞳の力に耐え切れず千影が目を逸らしたとき再び雪葉は語りだした。

「ですから、私は千影様のお力になれるよう、今日からお世話させていただきます。どんなことでも、どんなときでも、千影様のために私はなんでもいたしますわっ」

さっきまでの張り詰めた空気は解き放たれ、再び雪葉は料理を始めた。

（母さんのことだからな。逆らっても無駄か）

千影は小さなため息をつき、苦笑いを浮かべる。

「ねえ、鍵は母さんからもらったの？」

「そうですよ」

「そうか。わかったよ。母さんが言うならきつと君は信用できる人なんだろうな……。仕方ないか。今日からよろしく。如月さん」

千影はあきらめたように片手を差し出すと、雪葉は頬を膨らませて上目遣いで睨んだ。

「えっ、どうしたの？如月さ」

「さっきからっ！如月さんなどといった他人行儀な呼び方ではなく、

雪葉とおよび下さいっ！そうでないか、もう返事して差し上げませんっ」

そういつと雪葉は目をつぶりそっぽを向いてしまった。

（弱ったなあ。女の子を名前で呼び捨てなんて小学生以来だよっ）

千影は顔を真っ赤にして小さく声を絞りだす。

「……は……しく」

その声が聞こえていたのかいないのか、雪葉は薄目を開けて千影を一瞥する。

「なんておっしゃったの？」

「……もうっ、雪葉っ！これからよろしく！これでいいだろっ！？」
茹蛸のようになった千影をみて満足したのか、雪葉は差し出された手を握り返す。

「こちらこそよろしくおねがいますっ」

天使のような微笑が千影を襲った。

こういつた経緯で千影と雪葉は一緒に住むことになった。雪葉が食事を作っているときに千影は叔母に電話したのだが、叔母曰く「そういうことだから。よろしく」と至極あっさり一緒に住むことを容認された。日本では自分と同じく叔母が後見人になっているらしい。

（前もって話してくれよな。いつも適当なんだから。叔母さんは）
電話をきいたあと頭の中で文句を言いつつ、現状を飲み込もうと躍起になった。

久しぶりの一人ではない食事は、とても美味しかった。

次の日、千影は誰かに会ってはいけないと思えば別々に登校することを提案したらその提案は即座に拒否された。

「私が傍におりませんと、千影様を守れません」

と、上目遣いで睨みながら千影に食い入る。逸らしても逸らしても目の前に入り込んでくる雪葉の視線は小動物のように可愛く、それ

が必死なのだから男の感情としては逆らうことは難しい。千影は渋々一緒に行くことを容認するしかなかった。そして、家から出たところをたまたま近くに住んでいた茜に目撃されるだなんてことは、誰にも予測ができなかったはずだ。そこからは無言の圧力が千影を襲う。千影の右腕に終始しがみついている雪葉もそれを助長させているらしかった。千影に理由はわからなかったが、左斜め後ろからの圧力は学校まで陰ることがなかった。

こうして両脇に対照的な美少女を携えることになった千影は、周囲からの羨望と嫉妬の眼差しと比例して、気分を落ち込ませていくことになったのだ。

「千影っ、お前どういうことだよ！ 一日でなにがあつたんだ？
なあ！？」

昼休みになり貴明は涙目になりながら千影に詰め寄る。肩を掴む両手は震えており必死さはみてとれた。

「いや、俺も正直あんまり把握していないんだよ。頭が痛い」
両腕で頭を抱えてへたり込む千影。

「あら、千影さま。大丈夫ですか？ 保健室に行かれますか？
あつ、それならつまらない授業なんか休んでしましましょうか」

そう言いながら雪葉は甲斐甲斐しく千影の世話始める。

「だーっ！ だからなんなんだ、その甘い関係はっ！ いつからそんな手が早くなつたんだっ」

孝明は理解できない状況に両手を上げてただ叫ぶしかできなかった。
「そんなんじゃないんだけど……。昨日以上に五十川さんからは敵視されているし……」

千影はそういうと貴明に目配せする。

「たしかに。あれも何をやったんだ？ と聞きたいが、お前は自分

から争いをするようなやつじゃないしな。よくわからないが昨日以上の剣幕だ……」

茜のいる方向に誰も目を向けられなかった。当然だ。元々恐れられてた茜が殺気をむき出しにして敵意を隠すことなく教室にいるのだから仕方ない。昨日からそうだったのだが、今日はそれをより研ぎ澄ましたような威圧感である。

「でも、美人に構われるんなら、俺はなんだって羨ましいぞっ」

そういうと、孝明は椅子に座り再び涙を浮かべた。その様子に千影は怪訝な顔をする。

「あれ？ 孝明は心ちゃん命だろ？」

「ああ、それはもういいんだよ……」

貴明は侮蔑の視線を何処か遠くに向けるとあざ笑うかのように顔を歪める。

「いたんだ……」

「えっ？ 何が？」

唐突に呟かれた言葉にすかさず千影は問いかけた。

「だから、心ちゃんには彼氏がいたんだよっ！ なんでもジョニーズとかいうアイドルと付き合ってるみたいでさ。そんなふしだらに恋したわけじゃない！ そう思って傷心登校してきたというのに、

千影……お前ってやつはーっ！」

そう言うとき貴明は瞼にたまった大粒の涙を垂れ流しながら千影の髪の毛を無造作に掴み乱しはじめた。

「俺は、本当になんでもないんだって」

千影は何を言っても孝明は聞くことはなかった。

しばらくしてようやく貴明が落ち着くと、途中から無言を貫いてきた雪葉はおもむろに立ち上がった。

「どうしたの？ ゆ、雪葉……？」

千影が問いかけるも反応はない。よく見ると顔には表情がなく、ある一点をみつめていた。

そしてゆっくりとその対象に近づくと氷のように鋭く言葉を発する。

「その頭が悪そうな独活の大木さん？ いい加減千影様に失礼じやありません？ 不機嫌極まりない醜い視線を千影様に向け続けるなんて。言いたいことがあるならおっしゃったらいかが？ あなたは駄々をこねてる幼稚園児か何かですか？」

「なっ!？」

そう言い放たれたのは茜だった。予想だにしなかった言葉に教室全体の声が詰まる。

千影も孝明もその行動には驚愕し、身を硬直させるしかできなかった。

「あら？ なんにもいえないのかしら？ その胸についている有り余った脂肪のせいで脳に栄養がいかなかったのかしらね。まあ、不愉快な顔を私達に向けなければいいんですから、そのまま下を向いてすごしてくださいさる？ 乳女っ」

そこまで聞くとやつと怒りが行動にたどり着いたのだらう、勢いよく茜も立ち上がり雪葉を正面に見据えて睨みつける。対して雪葉はうつすら歪んだ笑みを浮かべたまま冷たく眺めていた。

「あんた、さつきから聞いてれば何様のつもり？ 私は大木でも乳女でもないわよ！ ただね、目障りなのよ、あんたたち。あんたたちだってOBSでしょ？ 身の程をしれっていうのよ！」

茜は憎しみをぶつけるが如く罵声を浴びせる。

「あら、それは貴方だって同じでしょう？ そんなこともわからないのかしら乳女は。」

「だからその乳女つてのやめなさいよ！ あんたなんか全然胸なんかないじゃないっ！ どうせ洗濯板みたいな貧相なもんだからあなたの胸に嫉妬してるんでしょ！」

「そんなものはいりませんわ。私は心も身体も千影様に捧げています。だから、今はまだ至らない胸もきつと千影様はゆつくりとご自分の手で育ててくださいますわ。あなたなど、乳でも搾られて使い捨てられるのが落ちですわよっ」

「なっ、育ててもらおうとか、さつきからいやらしいのよ、あんた

ちはっ！ つ……もう我慢できない、あんたたち二人ともちよつと表にでなさい！ その腐った神経たたきなおしてやるっ」

「望むところですよ」

そういうと二人は教室の外に出ようと足を踏み出す。

あまりの勢いに呆然としていた千影はその事態のまずさに咄嗟に身を乗り出した。

「ちよつと待ちなつて、二人ともっ！ そんなことしたつてしょうがないよ」

二人の前に立ちほだかり両手で行く手を阻む。

千影の腕を茜が払った。

その刹那、廊下側の窓ガラスがはじけ飛ぶように割れる。

「きゃああああっ」

「千影様っ」

教室に響くガラスの碎け落ちる音、悲鳴、叫び声。

それが落ち着いた直後に学校中が騒がしくざわめいた。

千影達も同様であり、咄嗟に身を翻した茜と雪葉は特に大きな怪我もなく割れたガラスを見つめている。

「なんなんだよっ、これ」

体中に降り注いだガラスの粉をはたきながら引きつった顔で孝明が叫ぶ。

「みんな、怪我は!?!」

千影は周囲を見渡すと飛び散ったガラスで切り傷を作った生徒はいるが大きな怪我をおっているものはいなかった。

「千影様、お怪我は?」

千影に駆け寄りながら雪葉が問いかける。

「あ、大丈夫。雪葉はどう?」

「私は大丈夫ですよ」

状況が飲み込めず皆、周囲の観察につとめていた。

「ちっ、早すぎるっ」

茜は小さく呟くと両拳を強く握り締めていた。

その眩きは周囲のざわめきで聞こえない。

「ちよつと、あんたたち。こうなつたら問答無用で来てもらつわよ」
そう強く言い放つと、千影と雪葉の手をとり教室を出る。

「えっ？五十川さん、なんなの！？　こんな状況だし動かないほうが……」

「いいからつ、今度はちゃんと説明するからいいから来てつ」

「なつ……」

茜の素早い動きに雪葉も文句を言えずただただ従う。

「あ、孝明、もし先生来たらちよつとごまかしといてつ」

「あ、ああ……」

「頼むつ」

そういうと、あつというまに姿が見えなくなった。

3人が消えた教室では、孝明と他のクラスメイトが惨状の中立ち尽くしている。

拙いながら早くも日常の感情を取り戻し始めた人々は怪我がないことに安堵し散らばったガラスの片付けを始めた。

その空気を拒絶するようにOBSの三人は外へでる。張り詰めた神経が緩まないように。

遠ざかる日常に気を馳せながら、千影は止まることのない胸騒ぎに身をまかせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1676z/>

Brain Syndrome 脳過活動症候群

2011年12月17日02時46分発行